

社会 第5学年 情報社会に生きるわたしたち 検討会の想定問答

指摘 1：本時で何を見取るのか。

返し：「確かな情報を伝えるため、送り手はどのような仕事をしているだろうか」について、人々の働きや資料同士の関係に着目し、根拠を挙げて説明している。結論だけではなく、どの事実を選び、なぜその事実で説明できると考えたかを見る。(4)の学習を具体的な記録で確かめる。

指摘 2：活動だけで終わらないか。

返し：ニュースを作る過程の資料から、取材、情報源の確認、編集、発信の仕事を整理する。同じ出来事でも選ぶ情報や示し方が違うことを比較し、速さと正確さの両方が必要な理由を考える。活動後に中心の問いへ戻り、事実と説明を線でつなぐ。(4)で求める理解と表現をそこで確かめる。

指摘 3：予想と違う結果が出た場合はどうするか。

返し：自分の感想と確認された事実を同じ欄に書く子には、発信元を付けた事実欄と考え欄を分ける。情報の速さだけで信頼性を判断せず複数資料で確かめる 予想に合わせて結果を書き換えず、条件や資料の読み方を再確認する。(4)に関わる考えを見直す学習として扱う。

指摘 4：説明や記述が難しい子にはどうするか。

返し：比較する記録を並べ、対象・条件・時期を指差して話せるようにする。送り手と受け手の立場で比較する活動では、教師が比較の視点を示してから児童の言葉で説明を聞く。代筆や図の使用は認めるが、考えそのものを教師が決めない。

指摘 5：安全や個人への配慮は何か。

返し：実在の人物について未確認の情報を作ったり発信したりしない。記事や映像を丸ごと転載せず、出典を付けて必要な事実を自分の言葉で整理する 実施前の点検ができない活動は共通の記録資料に替え、(4)の問いを考える機会を確保する。

指摘 6：資料やICTはどのように使うか。

返し：ニュースを作る過程の資料から、取材、情報源の確認、編集、発信の仕事を整理する。同じ出来事でも選ぶ情報や示し方が違うことを比較し、速さと正確さの両方が必要な理由を考える。画面は拡大や並列表示に使い、端末がなくても印刷した同じ記録で比較できるようにする。ICTの操作の速さは評価しない。

指摘 7：時数の根拠と削る場合の考え方は。

返し：全8時間は日本文教出版の年間指導計画による。各次の配分は本案の提案である。削る場合も「確かな情報を伝えるため、送り手はどのような仕事をしているだろうか」を追究する記録と説明の時間を残し、同じ資料を読む重複や清書の方法を見直す。安全確認や実物を確かめる過程は省かない。

指摘 8：振り返りと次の指導をどうつなぐか。

返し：「確かな情報を伝えるため、送り手はどのような仕事をしているだろうか」について最初の考え、根拠にした記録、まだ残る疑問を読み比べる。情報産業の役割と責任を説明する活動で根拠が不足した児童には、その記録を次時の導入に戻して確認する。態度は感想の長さではなく、調べ方や説明を見直す行動を継続して見る。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

